

教えられることの多かった友人

川 口 勲

私は東京商科大学で、たまたま彼と佐藤弘教授のゼミナルに入り、経済地理を専攻することになった。その時、ウィットホーゲル教授の地理学を学んだが、そのなかに、自然と人間の交互作用ということが出てきて、人間が自然に大きな変化を与えれば自然は必ず同様の変化を人間に与えるというような意味だったと記憶するが、当時は何のことがさっぱり理解できなかった。それから三十五年経過し、世界中いたるところに公害問題が顕現してきて、私もウィットホーゲルのいった意味がやっと理解できた。

彼と会うようになったのは、彼が池田内閣の官房長官の時代であった。私は三井鉱山経理部副部長であったが、不幸にも三井鉱山三池鉱業所で大争議が勃発した。当時総資本対総労働の対決とまでいわれたほどのもので、池田内閣の指導を仰ぐこともしばしばであった。私は官房長官と友人ということ、走り使いを仰せつかり、たびたび彼と会った。学校卒業後二十四年経っていたが、学校時代からの変わらざる友情をもって接してもらい、彼の人柄を目のあたりに見て、よき友人を得たものだと大変有難く思った。その後昭和四十三年になって、三井アルミニウム工業株式会社が設立され、私はその会社に移った。四十八年の第一次オイルショック後は電力費が高騰し、アルミ産業の苦難の道が始まった。仕事を石炭からアルミに変えたらまたもや高い油によって日本のアルミ産業が国際競争力を失う結果となった。そのためアルミ製錬業界として、また彼の力を借りる羽目となった。

石油価格の高騰と供給の制限によって、省エネルギー時代に入った。アルミという金属は、生産する場合は大

量のエネルギーを消費するが、一旦製品になれば、これを使ったサッシは冷暖房に大きなエネルギーを節約し、自動車、鉄道車輛等に使用すれば比重が軽くてエネルギー節約になるという特殊金属である。従つて今後ともアルミの消費量は増大するとの判断から、海外で開発して輸入するという考え方に変わつてきた。そこでわれわれは、海外での大プロジェクトを二つ計画した。一つは、インドネシアにおけるアサハンプロジェクトであり、一つはブラジルのアマゾンプロジェクトであった。これらのプロジェクトはいずれも大プロジェクトであつて、国家資金の投入を必要とするものであつた。これらの計画に目鼻を付けるべき時期に、運よく彼が大蔵大臣であつた。私は何回も彼に会いその必要性を説いた。彼は充分検討の上、理解してくれた。

また二月月に一回の芳明会の最後は、五十五年四月十七日の霞友会館でのスキヤキ会であつた。この時は珍しくゆつくりして、六時から八時頃まで楽しく四方山話に花が咲いた。総理としての苦悩を胸に秘めながらも、いつもの大平君にかえつて酒も飲んだように記憶している。今にして思えば、これが彼との永遠の別れになつた。

私は五月十日成田を發つて、アメリカ、ブラジルに旅立つた。アメリカで大平内閣不信任案が成立したと聞かされ愕然とし、ブラジルでは、アマゾンプロジェクトのブラジル側の当事者リオ・ドセ社のエリーゼル・パチスタ社長から「川口君、大平内閣不信任案がどうして成立したか」と尋ねられたが、私も全く分らないと返事するほかなかつた。エリーゼル社長は大の太平信奉者であつて、彼も全く不快の念をありありと示した。私は帰国後高熱を出し、六月十二日肺炎で三井記念病院に入院してしまつたが、彼はその日の早朝虎の門病院で亡くなつた。私は入院の身で弔問にも行けず、かなしみを一人でかみしめねばならぬ不運に見舞われた。七月九日日本武道館での葬儀には医師の許可を得て病院から出席したが、惜しい友を早く失くしたものと心から残念に思えてならなかつた。